

である。

(四六判 二七五頁 一九八〇年六月
東京大学出版会 一八〇〇円)
(明治三三 京都大学研修員)

高橋 理著

『ハンザ同盟』

日本におけるドイツ・ハンザの研究は増田四郎、高村象平両氏の先駆的な業績に加えて、一九七三年には関谷清氏の浩瀚なる初の通史『ドイツ・ハンザ史序説』を得ている。さらに近年のこの分野における個別研究の著しい進捗を併せ考えれば、当然ながらここでこうした研究をふまえたすぐれた啓蒙書の刊行が望まれるところであった。本書の著者、高橋理氏は初期ハンザ商業をテーマに地道な研究を続けてこられたエキスパートであり、かかる啓蒙書の著者としては最適である。

本書の構成と内容は、大略以下の通りである。1 ハンザの前身、ではドイツ商人のバルト海進出、そしてハンザの出発点ともいふべきリューベックの建設を述べ、2 商人ハンザの時代、においてはハンザ史の

前半、即ち一二～一四世紀中頃のゴートランドを拠点とするバルト海商業や北海商業に活躍した遍歴商人の特権的団体としてのハンザの時代を論ずる。3 都市ハンザの成立、では帝国都市としてのリューベックの発展とバルト海沿岸へのリューベック系諸都市の建設、ヴェント都市を中心とする自然発生的な都市連合の形成、即ち都市ハンザの成立及び一三、四世紀のフランドルやデンマークとの抗争を通しての都市ハンザの強化、約言すればいわゆるハンザ同盟の成立過程が明らかにされ、4 一四世紀前後のハンザ貿易、ではスカンディナヴィア、バルト海諸地域、フランドル、イギリスとのハンザ商業の実態が各々の地域の経済的、政治的特性をふまえて述べられる。5 ハンザの機構および貿易と都市の態様、は盛期におけるハンザの全構造にふれ、ハンザ総会、中央機構、外地商館(コントール)、ハンザ貿易の基本的性格等を簡潔にかつ生々として描出する。最後の二節ではゴシック都市リューベックの全体像が鮮やかに再現されている。6 ハンザの衰退、では一五世紀におけるフランドル、イギリス、デンマーク等の強力な国家権力によるハン

ザ特権の度重なる侵害、オランダ商人のバルト海進出、これに対するハンザの戦い、プロイセン都市のヴェント都市からの離反、ハンザ都市の内部矛盾、市民闘争など内部の動揺、等のハンザにとつての危機的な現象が詳論され、7 ハンザの末路、では諸地域の政治権力の圧迫下での外地商館の没落と消滅、新しい同盟体制による再建の試みを述べ、そして三〇年戦争後、一六六九年のハンザ総会を最後とするハンザの自然消滅によって本書の叙述も閉じられる。

以上のように本書はハンザ通史としては、上記の関谷氏やP・ドランジェの通史叙述とほぼ同様の無理のない構成をとっている。しかし他方で筆者自身指摘するように、リューベック史とハンザ・イギリス関係史を叙述の中心に据えることによって類書にはない独自性をそなえている。また著者は商業史とこれにかかわる対外関係史の考察を中心としたために平板になりがちであった従来のハンザ史叙述の弊をさけるため、ハンザの基本的構造を基軸として、その成立、展開、衰退を論ずること、即ち分析的視角をもつことに心がけている。つまりハンザは北ドイツ商人資本の共通利害、即ちリュ

ーベックを中心とするヴェント諸都市を結節点としたバルト海・北海仲継貿易の特権的独占、によって結ばれた経済的連合体だったものであり、かかるハンザの本質と構造が五〇〇年の長きに亘って各々の時代と地域の歴史的環境に規定されつつ展開する過程を把握することがハンザ史研究の課題なのである。

さて上記の如き共通利害を前提としながらも、かかる利害の代表たるヴェント諸都市とプロイセン都市やケルンなどの西部ドイツ都市の間の対立はハンザ後期には顕著化するなど、諸都市間の連帯は意外に脆弱であったことは著者も強調する通りであり、そのことは第五章で述べられるハンザ総会の出席都市の少なさ、中央機構・財政の弱体性等にも明示されている。つまり著者の指摘通り、いわゆるハンザ同盟はその末期を除けば、現実には同盟たる性格を殆ど持たなかったのである。(但し著者が国際法という近代法的概念を用いて、中世を通してのハンザの非同盟的性格を指摘するのは首肯され得ぬところである。) また上記の如き特権的仲継商業の独占に固執し、ハンザ史の終焉に至るまでこれを守るべく奮闘

したのはいうまでもなくリューベックであった。ハンザ史は個々の都市史、商業史の寄せ集めではないが、関谷氏が述べるように「リューベックは一都市以上のもの、即ち全バルト海、全ハンザ」であったとすれば、本書のポイントをリューベック史に置いたのは著者の炯眼である。第5章に含まれるリューベック社会の考察は簡潔な叙述のうちにハンザ市民の心性を見事に捉えている。また、スタティックになりがちなハンザ史叙述にダイナミズムと厚みを加え得るもうひとつの要素は、ハンザ都市の社会構造の分析であるが、本書は中世末期ハンザ都市の階層的構造の数量的研究の紹介にも意を用いている。(但し一九五頁に引用されたフォン・ブラントの表に付された説明に納税額とあるのは、課税財産額―課税所得額でもない―の誤りである。) この他多くの統計表を用いて考察される対イギリス商業の展開は本書の圧巻であり、新書刊の域を超える経済史研究をなす。

K・フリッツェが述べるように、ハンザの本質の捉え方はその衰退の開始期を何時と考えるかに示されるとすれば、著者が一五世紀のハンザを、貿易上の統計や政治抗

争における一時的成果にもかかわらず、その中世的性格の故に近世的原理の台頭の前に陰りを生ずる時期にあるものと把握するとき、著者のハンザの本質理解とハンザ史叙述は正確に噛み合っているといえよう。著者はハンザ衰退の主要因を近世的(国家的)原理―外庄に求めているが、これは穏当なところであろう。但し著者も述べるように滅亡にむかったのは都市でも貿易でもなく、中世的都市連合としてのハンザそのものであったことを忘れてはならないだろう。耳慣れた呼称とは裏腹にその実態が一般に知られることの少なかったドイツ・ハンザについて、かかる高水準の啓蒙書を公にされた著者、高橋理氏の労を多としつつ筆を擱くことにする。

(新書判 二九七頁 一九八〇年九月
教育社 八〇〇円)
(服部良久 天理大学講師)